

## 戦国列車

戦国列車：井原の歴史へのトリビュート

井原のサムライの時代を訪ねる旅は、井原鉄道に乗ることから始まる。井原鉄道は広島県の神鍋から岡山県の総社までを走る井原線一路線のみを運行している。有人駅では紙の切符が販売されているが、通常、乗客は「ワンマンカー」の列車を降りる際に現金で支払いをしなければならぬ。いくつかの 1-2 両編成の列車には、珍しい装飾やデザインが施されており、この路線は鉄道ファンに人気がある。中でも目を引くのが、歴史をテーマにした「戦国電車」だ。

戦国列車は、戦国時代（1467 年～1568 年）をテーマにした 1 両編成の列車だ。弓矢のシルエットや、地域の武将同士で熾烈な群雄割拠の時代にこの地を統治、あるいは侵攻した武将の家紋などが飾られている。また、沿線の市町村の紋が入った武士の兜の模型で装飾された吊り革もある。戦国列車に乗ることはさながらガイドツアーのようなもので、この地域の重要人物や有名な古戦場、山城についての歴史的な事実が書かれた日本語と英語の解説がある。

戦国列車は 1 日数便、不定期で運行されており、井原鉄道のホームページで確認できる（日本語表記のみ）。

## 戦国時代の権力

戦国時代とは、中央の政府が地方武将達を統御できなくなったために相次いだ血なまぐさい動乱からその名がついており、地方武将達のお家騒動や領土拡大の試みはたちまち戦闘へと発展した。この時代はまた、民衆の反乱の時代でもあり、技術の発展と高度な文化が成熟した時代でもあった。

この時代、軍事力も地域交易も街道に大きく依存していた。特に重要な街道が、日本の多くの地方を結ぶ七道であった。七道のひとつ、瀬戸内海沿いの旧山陽道（少しルートは異なるものの現代の山陽自動車道の前身）は、本州西部と京都を結ぶ主要ルートであった。この街道の一部は、小田川に沿って井原を通っていた。山が迫っているため、井原は武将が街道や川の利用について影響力を行使するのに有利な場所であった。この地において影響力を誇示するための争いは絶えず、戦国時代以前から、さまざまな勢力がこの地域に侵攻してきた。

街道沿いの交通を監視・管理するため、山城と呼ばれる戦略的要塞が築かれた。これらの山城は、豪華な構造を持つ厚い壁のそびえ立つ城ではなく、物資や武器が保管されていた簡素な木造の物見櫓や兵舎であった。これらの建造物へのルートは、険しい地形に築かれた土塁や堀で塞がれていることが多かった。周囲の山の地形が守りの要となるため、いわば山そのもの

が「城」であった。戦国武将はこれらの拠点を、街道や河川に対する力の誇示や、攻撃を受けたときの防衛に利用した。

高越城は井原でも有数の山城であった。かつては旧山陽道の北にある同名の山の上にあり、木造建築はなくなったが、市街を一望できる記念公園が残っている。

北条早雲：最初の戦国大名

高越城は、死後に北条早雲と（1432-1519）として知られた伊勢新九郎盛時ゆかりの城として知られている。出生地は不明だが彼は備中伊勢家に生まれであり、同族は高越城を支配していたことから、井原で生まれた可能性がある。早雲は後に伊豆国を征服して戦国時代における極めて重要な大名となる。彼の子孫は関東地方の多くの地域を支配し征服を続けたが、一族は最終的には1590年、豊臣秀吉（1537-1598）の天下統一のための侵攻に敗北した。

早雲の伊豆征伐は、戦国時代の真の始まりと見なされることがあり、彼の新領土獲得への積極性は、同時代の他の大名の野心に影響を与えた。その後半生において彼が井原の地を統治することはなかったが、歴史に大きな足跡を残したことから、地元の人々に愛される人物となっている。早雲の里 荏原の駅名は彼にちなんだものであり、彼は戦国列車の車体カラーリン

グの中心的な位置を占めている。車両前面のバッジの中央に描かれているのは早雲の顔である。